
つよきやらっ！

TAIGA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つよきやらっ！

【コード】

N5508X

【作者名】

TAIGA

【あらすじ】

ごく普通の高校生『高中 暁斗』の周りには、とんでもないヒロインばかり！

そんな周囲に振り回されながら、頑張って日々を送る暁斗のドタバタ学園ストーリーここに開幕！！

高中姉弟の朝

世の中には理不尽というものがまかり通っているものと、高中
暁斗（たかなか あきと）は常々感じている。

例えば今、暁斗の前に仁王立ちしている姉……高中 由希奈（たかなか ゆきな）がその象徴ではないだろうか。

由希奈は言う。

「暑い！ 蝉煩い！ ちょうどいいわ 暁斗、蝉を殺しに行くならついでにアイス買ってきなさい！」

……確かに今は夏で、朝とはいえ気温は高く、外で大合唱する蝉達の鳴き声もかなりの物だ。

加えて暁斗は外出しようと玄関に向かってはいたが、それは学校に行く為で、決して蝉を虐殺しに行く為ではない。

「あのさ……朝っぱらから何を言ってるの？ 俺が今蝉を殺しに行くように見える？」

暁斗は着ている制服を指で摘むと、呆れ顔で由希奈に問う。

由希奈は腕組みをしながらマジマジと暁斗を眺めると、やや苛ついた様子で口を開いた。

「蝉殺すのに服装なんて関係ないわっ！ 要は心意気。そう、心意気なのっ！！」

……言っている事がめちゃくちゃだ。

暁斗は半分諦めた顔で由希奈を見る。

小柄な身体に腰まで伸びた長い髪、そして童顔で可愛らしい顔付きをしている由希奈は、パツと見た感じでは優しそうな女性といった印象を受ける。

実際、彼女が開業している『高中診療所』ではその見てくれに騙された患者が、彼女目当てに足を運ぶという現象が起きているのだ。

「とにかくさ……俺は学校に行くんだよ。それに仮にも姉ちゃんは医者だろ？ 医者が殺す殺す言ってるのも問題じゃないの？ 蝉だって一週間しか生きられないんだから簡単に殺しちゃったら可哀想だろ」

暁斗が諭すように言うと、由希奈はいきなり暁斗の目前まで勢いよく詰め寄る。

「なっ!?!」

慌てる暁斗。

そんな暁斗の両肩を掴み、由希奈は真剣な眼差しを向けた。

「……暁斗、よく聞きなさい。世の中は弱肉強食。強い者が勝ち、弱い者は淘汰されるの。分かる？ お姉ちゃんはそれを暁斗に学んで欲しいの。ううん大丈夫！ 例え暁斗が外で狂喜乱舞しながら蝉を虐殺してその骸を貪り喰っていても貴方は私の可愛い弟。お姉ち

「やんは決して見放したりドン引きしたりはしないわ？ だから安心して殺戮の天使になりなさい」

「しねえよっ！！ 何で俺がそんな危険なキャラにならなきゃいけないんだよ！ もういいっ！ 俺は学校に行くからなっ」

支離滅裂な姉を突き飛ばすと、暁斗は玄関の扉へと踵を返す。

「あーもうアツタマ来た！ お姉ちゃん超頭きたっ！！ こうなったら今日きた患者全員に『それは恋の病です』って言ってやるっ！！」

「いや、それはやめとけっ！ 大変な事になるから！ 頼むから診察だけらまともによってくれっ！！」

膨れっ面で暴れる由希奈に慌てて詫びを入れる暁斗。

「……じゃあ帰りにアイス買ってきて。2000円のやつ」

「……はい、よろこんで」

ようやく落ち着いていた姉、由希奈に釈然としない気持ちを押さえながら暁斗は玄関の扉を開ける。

……今日も騒がしい一日になりそうだ。

夏の陽射しに目を細めると、暁斗は学校へ向かってゆっくりと歩き出した。

武蔵野 瑠夏の朝

早朝五時。

「……九千九百九十八！ 九千九百九十九！ 一万っ！！」

武蔵野 瑠夏（むさしの るか）は日課としている正拳突き一万回を終え、静かに突き出していた拳を下ろした。

その前に三十キロに及ぶランニングをこなしているのだが、瑠夏の呼吸は全く乱れる気配はない。

「さて……朝の鍛錬はこのくらいでいいかな？」

軽くストレッチをしながら、横目で倒れ込んでいる男達見る。

二十人はいるであろう屈強な男達は、すでに息も絶え絶え死屍累々といった状態で、全員横たわっていた。

これは武蔵野流空手道場の庭で毎朝見られる光景で、別段珍しい物でもない。

その中で唯一平然と立っている瑠夏が、溜息混じりで頭を振る。

「全く情けないな。お前達、日頃の鍛錬が足りないんじゃないのか？」

肩で綺麗に切り揃えた髪をかきあげると、やや厳し目の言葉を男達

に投げ掛けた。

すると男達の一人……恐らく武蔵野流道場の門下生なのであろう、鋭い視線で見据える瑠夏に向かって口を開いた。

「し、しかし師範……。流石に三十キロランニングと、前回し蹴り五千回、後ろ回し蹴り五千回、正拳突き一万回のメニューはハード過ぎます！」

そう、この男が言う通り瑠夏は女子高生にして武蔵野流空手道場の師範である。

しかもその強さといったら周囲から『鬼神』と呼ばれる程だが、凜とした真っ直ぐな眼差しと、面倒見の良さから彼女を慕う者も多い。

何より、瑠夏は美人である。

武蔵野 瑠夏の朝2

「それでは私は学校に行かなければならないので自室に戻るとしよう。全員、鍛錬を怠らないように！」

言いながらその場を立ち去る瑠夏。

その、何処までも凜とした後姿に門下生達の誰もが目を奪われた。生まれてすぐに母親を亡くし、拳聖と呼ばれた父に育てられた瑠夏であったが、その父まで三年前に亡くし、それからというもの若い身空で道場を引っ張ってきたのである。

それだけの物を背おった瑠夏の背中には、計り知れない大きさが感じられた。

「押忍！！」

門下生達はハードワークの為に動かない体に鞭を打ち、瑠夏に向かって頭を下げた。

「…………ふう」

シャワーを浴び、道場の二階にある自室に戻った瑠夏は部屋に入るなりに深い溜息を漏らす。

「…………あ…………あ」

瑠夏は妙な声を上げながら恍惚とした表情で部屋をぐるりと見渡した。

やがてへたりと力無くその場に座り込む。

「あきとお〜！」

瑠夏の視線の先には、部屋中に貼られた大小様々な暁斗の写真。

無論、全て隠し撮りした物である。

「あきとアキト暁斗おっ！！」

瑠夏はベッドに置かれた、暁斗の姿がプリントされた等身大抱き枕に向かって、勢いよくその身を投げる。

「はあ…………暁斗」

抱き枕に顔を埋めた瑠夏は、ウツトリとした瞳で本日何回目かの『暁斗』を呟く。

「あんな暁斗。今日もるかちゃん朝練頑張ったぞ？えらいぞって頭ナデナデしても良いんだぞ？」

潤んだ瞳で抱き枕に話掛ける瑠夏。

そう、これが鬼神じゃない方の武蔵野瑠夏である。

転校してきた高中曉斗に一目惚れしてしまった瑠夏は、見事にストーカーと化した。

幼い頃から武道しか知らない瑠夏は、その気持ちをどうしたら良いのか検討が付かなかった。

その結果がコレなのである。

「あっ！」

フと時計（曉斗の顔が印刷された特注品）を見た瑠夏が慌ててベッドから飛び起きる。

「もうすぐ曉斗が家を出る時間じゃないか！ こうしてはいられない！——！」

瑠夏は驚く程の速さで制服に着替えると、学校……いや、曉斗の住む高中診療所へと向けて走り出すのであった。

仲川 皐月の朝

仲川 皐月（なかがわ さつき）は、いつもの様に自宅近くの公園へと散歩に来ていた。

手にはビニール袋に入れられた三枚の食パン。

中規模程度の公園には多くの鳩が生息していて、動物好きな皐月は毎朝散歩がてらに鳩達に餌を与えていた。

早朝の公園には犬を散歩させている人達もちらほら見受けられ、その犬を眺めている事も皐月のお気に入りだった。

「ほら、沢山食べてね」

いつものベンチに腰掛けた皐月が食パンを細かく千切ってばら撒くと、どこからともなく鳩達が皐月の周りに群がってくる。

やや茶色がかったセミロングの髪が陽に照らされ、可愛らしい外見の皐月が鳩達に囲まれている姿はとても絵になっている。

「あれ？」

食パンを千切っていた手を止め、皐月は何かに気が付いたかのように前方に目を向けた。

視線の先には公園の外の道を猛スピードで走っていく武蔵野瑠夏の姿があった。

その後にはやや遅れて道着を着た男達が続く。

瑠夏に比べ、まるでボロボロのゾンビの様だった。

「武蔵野さんだ……」

皐月は深く溜息を吐く。

皐月と瑠夏は同じクラスである。

活発で、誰からも慕われているいわばリーダー気質の瑠夏は、内気な皐月の憧れだった。

「……お友達になってくれないかなあ」

そう呟く皐月には実は友達と呼べる人間が一人もいない。

優しく、他人思いで、性格の良い皐月ではあったが、幼少の頃から友達が出来た試しが一度もなかった。

それは高校に入学してからも変わらず、高校二年になった今でも孤独な毎日を送っているのだ。

「はあ……」

項垂れながら二度目の深い溜息を漏らす皐月。

仲川 皐月の朝2

「……帰る」

手に持った食パンを全てばら撒き終えた皐月が、しょんぼりとしながらベンチから立ち上がる。

その時だった。

「おはようございます」

犬を散歩していた老人が皐月に話し掛けてきた。

老人は毎朝鳩に餌を与えている皐月を犬の散歩中に見ていて、心なしか元気がない皐月を心配して後ろから声を掛けてみたのである。

「……………!!」

その瞬間の事だった。

皐月の身体が大きくビクンと跳ね上がると、途端に硬直し始める。

ギシギシギシッ!!

そんな音が聞こえてきそうなきこちない動きで、徐々に首を老人の方へと向ける皐月。

「お、お、お、おは、おはオハオハ……………」

奇妙な声を上げる皐月の周囲にある大気が震え出した。

バサバサバサツ！！

大気の異常を敏感に感じ取った鳥達が一斉に大空へと飛び立っている。

握り締め過ぎた拳からはポタリポタリと血が滴り落ち、噛み締めた唇の端からも一筋の血が流れ落ちる。

その姿はもうこの世の者とは思えない恐ろしさで、事実声を掛けてくれた老人はとうに腰を抜き、金魚の様に口をパクパクさせていた。

ちなみに連れていた犬は、とっくの昔に逃げたしていた。

そうしている間に、今や夜叉と化した皐月の身体からドス黒いオーラが立ち込めてくる。

それは殺気と良く似ていた。しかも莫大なものである。

「おおお、おはオハツ！ おはようございますっっっ！！！！……
つて、あら？」

ようやく皐月が挨拶を返せた頃には、老人の姿はもうそこに無かった。

それどころか、皐月の半径100mに動く物の姿すら見えなくなっていた。

これが皐月に友達が出来ない理由である。

極度の上がり症、赤面症である皐月は、他人と接した時に緊張のあまり絶大なる殺気を放つ。

それに恐れをなした人々は、皐月に恐怖心を刻まれて近寄らなくなってしまうのだ。

「はぁ……またか」

いつもの結果にガツクリと肩を落とし、皐月は学校の支度をすべくとボトボと家へと帰って行った。

蕪木 奈々の朝

「ふわあっ!？」

叫びと共に勢い良くベットから飛び起きると、蕪木 奈々（かぶらぎ なな）は肩で息をしなから部屋を見渡す。

「夢……か……。良かった……」

額から流れ落ちる汗を手で拭くと、安堵の表情を浮かべた。

酷く恐ろしい夢だった。

奈々は己がみた悪夢を思い返し、あまりの恐ろしさに身震いする。

もし現実に夢でみた様になってしまったのならば、奈々は生きていく自信がない。

奈々は呟く。

「ちやーはん……」

奈々がみた悪夢とは、この世から全ての炒飯が消えてしまう夢。

そう、蕪木奈々は無類の炒飯好きなのである。

奈々を知る人々は、彼女が炒飯以外を食べている姿を見た事がないと口を揃えて証言する。

すっかり目が覚めてしまった奈々は、もそもそとベットから抜け出すと、机の上に置かれた写真立てを手に取ってニコリと微笑む。

「おはようさんです。　ちゃーはんさん！」

写真立てには出来たての五目炒飯の写真。

無駄に高画質である。

朝の挨拶を済ませた奈々は、部屋を出るとリビングまで移動する。

母が朝食の用意をしているのであろう、キッチンから良い匂いが漂っていた。

「おはようさんです。お母さん」

「おはよう奈々。もうすぐ朝食が出来ますから、椅子に座って待って下さいね」

奈々の母親である朱理（あかり）はにこやかに娘に微笑むと、大火力で中華鍋を振るい始めた。

蕪木 奈々の朝2

「ふおおおっ！ お母さん凄いです！ 炎です！ 炎を完全に従わせていますっ！！」

我が母の鍋捌きを眺めながら、異様に興奮する娘。

「ふふふ…… 大丈夫よ奈々！ 貴女もいつか炎を自由自在に従わせる事が出来るわっ！ だって、貴女は私の娘ですもの！！」

言いながら朱理は一際大きく鍋を振ると、黄金色に輝く……炒飯がキラキラと輝きながら宙に舞う。

そして炒飯は朱理が素早く構えていた皿の上に綺麗に乗った。

「ふおおおっっっ！！ お母さんっ！ お母さんっっ！！」

奈々のボルテージは最早MAXである。

朱理は朱理で、炒飯が乗った皿を持ったままクルリと回転すると、ピシッとポーズを決めていた。

「さあ召し上がれ」

その後大人しくテーブルの席に着いた奈々の前に、朱理特製五目炒飯が置かれる。

キラキラ輝く炒飯をうっとり眺めていた奈々は、やがて神妙な顔

付きに変わり始めた。

「お母さん……」

「ん？ どうしました？」

奈々の対面に腰を下ろした朱理が優しく微笑む。

奈々はもじもじと身体を揺すりながら口を開いた。

「ちゃーはんさんが愛し過ぎて生きていくのが辛いです……。お母さんはそんな事ありませんか？」

「ないから安心なさい」

「……そうですか」

娘のおかしな質問にも、変わらずの微笑みを絶やさない朱理の返答に、何故かホツとした様子で五目炒飯に箸（蓮華）をつける。

「ふおおっ！ 最高ですっ！！ 完璧です！あえて言うならば完璧です！」

五目炒飯を一口食べた奈々は大きな瞳をより一層大きく見開くと、歓喜の声を上げた。

「完璧を二回言いましたよ？ それでね、奈々。さっきの質問なんですけど、お母さんの意見を聞いてくれますか？」

「ふぁい？ なんれすか？」

狂喜乱舞しながら五目炒飯を食している奈々に、朱理は飽くまで優しい口調で語り掛ける。

「奈々は言いましたね？　ちゃーはんさんが愛し過ぎて生きるのが辛いと。でもね？　生きていなければ、奈々は炒飯を食べる事が出来なくなってしまうのですよ？」

「ふおっ！？」

瞬間、奈々のバツクに稲妻が走った。

すでに食べ終えた五目炒飯の器に蓮華をおくと、茫然自失といった感じで天を見上げる奈々。

「そうでした……。辛くても生きていなければ、私の全国ちゃーはんさん制覇が成される事はないのでした……」

そんな奈々の様子を見て、朱理はクスリと笑う。

「でしょう？　それならば頑張りなさい！　さあ、そろそろ支度をしないと学校に遅刻してしまいますよ？」

朱理がチヨイチヨイと指で時計を指すと、奈々は慌てて立ち上がった。

「ふおっ！　もうこんな時間ですか！？　流石ちゃーはんさん！　時が経つのも忘れさせます！！」

奈々は朱理にご馳走様をすると、急いで身支度を整え、家を飛び出

していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5508x/>

つよきゃらっ！

2011年10月19日09時22分発行